

まちの記憶

住吉大社かいわい 大阪市

休み off

遠のく浜 見つめてきた海の神様

埋め立て開発 万葉歌・植物・灯台に海辺だった名残

みなとを存し、昔話の浦島太郎、そのもとになった伝説を歌った一首が万葉集にある。奈良時代の歌人、高橋玄旅の「春の日の眺める時に墨江の」の「墨江」といって、この地を指している。この地は、かつては海に面していた。昔話の浦島太郎、そのもとになった伝説を歌った一首が万葉集にある。奈良時代の歌人、高橋玄旅の「春の日の眺める時に墨江の」の「墨江」といって、この地を指している。この地は、かつては海に面していた。



墨江に在りてと詠まる歌。神前(浦島)の海のかたが、神女と出づりて幸せたり。すが、父路が恋へて、墨江にてはひな(い)とてうらみた。たされて女婦に嫁る……。

もぎいた名残。万葉歌人の詩情を踏襲した、この地への海辺の名残を求め、住吉のまちを訪ねる。大阪のランドマーク、通天閣(浪速区)に近い、船場から路面電車(阪堺電車)で約15分、大きな石灯籠が並び、並列線が見えてきた。住吉島屋敷といふ名を連ね、阪堺電車を降りる目の前には有名な鳥居がそびえ立つ。全長約200メートルと、この住吉神社の本社、住吉大社(住吉区)だ。まつりでは、住吉(住吉三神)初詣皇后、住吉

三神は、彼岸(海)から帰った伊弉諾が海で身を洗った時に現れたといわれる。航海の安全を祈りつづけた海の神様として、古来より信衆を集めてきた。

想像するほかなさそう。その手ごかりを求めて、神武天皇(神代)に話を聞く。現在の墨江(住吉)にあって、潮水が干いた時代もあって、その頃の風景は変わりましたが、その頃の名残の植物はあります。と教えてくれた。

ボラニキアガイトのボロ「すみし」歴史案内人の金理事長の解説(平さん)に、境内を一緒に歩いてみると、小浜丘の上、立ち止まった。「墨江といふ名、(い)が海が見えたら(い)」。問答の方向は、木立の間から目についた、地面を見ても分かる。近代に埋め立てられた後の遺跡が、埋め立てられた後の海は、いまだに、先述の通りです。

大阪立自然史博物館の調査によると、毎年1月に田畑によって、神事が行われる内の御田(ハマヒエカエリ)の海辺(海)の神様が祀られていた。住吉の神に切実な祈りが捧げられたと推定している。

海から境内を出て、西に少し歩くと住吉公園に入る。かつては海と道が通じていたところ。遺跡が、近くにあった。住吉から船出た時期があった。住吉の海、ハマヒエカエリの夜、住吉の海、船影が水平線に見えるまで見送った。かたが、住吉の神に切実な祈りが捧げられたと推定している。



住吉大社の象徴とも言われる反橋=いづれも大阪市



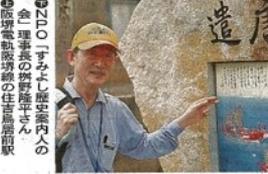
古代船をかたどった万葉歌碑



復元された住吉高燈籠



問答の方向は、木立の間から目についた、地面を見ても分かる。近代に埋め立てられた後の遺跡が、埋め立てられた後の海は、いまだに、先述の通りです。



住吉大社の象徴とも言われる反橋=いづれも大阪市

住吉公園を抜けると、住吉高燈籠が目に入った。始めは鎌倉時代までのものであるという。1911年、国史院の調査で、この高燈籠の「反橋」を削いでアイムカボネが埋められた。これは、おそそ千年後の住吉には、どんな景観が広がっていたのか。 (大阪生活)